

福祉施設実習の学びの特徴を踏まえた実習記録法の教材開発について

—実習経験の質を高めるために—

A study for developing teaching materials grounded in the characteristics of child care field learning
—Enabling students to improve quality of their learning experiences—

加藤悦雄

大妻女子大学家政学部

Etsuo Kato

Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：保育士養成教育，施設実習，経験の質，記録法（日誌の書き方）

Key words : Child care provider education, Field learning, Quality of experience, Note-taking method

抄録

本研究の目的は、保育士養成教育における施設実習の学びの特徴を明らかにしたうえで、施設実習の特徴を踏まえた実習記録法（実習日誌の書き方）の教材を開発することである。本研究の背景として、現場実習の事前学習において、「自己課題の立て方」や「日誌の書き方」に難しさを感じている学生が多く認められるが、その要因として、「施設実習で何をどう学ぶのか」といった固有の意義が十分に明確化されておらず、結果として、施設実習の特徴を考慮した記録法（日誌の書き方）を教示できていないという課題があると考えられる。

さて、筆者は保育士養成校の教員として、長年「保育実習Ⅰ（福祉施設）」を担当してきた。2021年度に本学児童学科において、施設実習の事前・事後指導を目的とする教科目「保育実習指導ⅠB」がスタートしたことを契機に、これまで使用してきた教材の見直しを進めてきた。本研究は、こうした経緯の中で新たに作成することとなったテキスト分析を基盤としている。

本研究の成果として、第一に、施設実習の学びは、子どもや利用者の生活を支えるケアの仕事の専門性はもとより、その基盤として、固有名をもつ人間の尊さや等しさ（個人の尊厳）への気づきを深めるといった特徴を論理的に導き出したことである。第二に、一人ひとりの実習生が、子どもや利用者との多面的な関わりとそれに伴う自他の感情の動きなど、言わば日々の実習経験に即応した記録（日誌の記入）を目途とする教材を作成したことである。

はじめに（問題意識）

本研究に取り組もうと考えた問題意識について、述べておくこととしたい。本研究対象である保育実習Ⅰ（福祉施設）の現場実習（12日間）は、毎年6月～10月の間に五月雨式に行われ、その前後に事前・事後指導が行われる。2020年3月以降新型コロナウイルスによる国内感染者数が増加し、現場実習にもさまざまな影響が及んだが、実習担当者としての一連の経験をとおして、現場に身を置いて学ぶ実習の意義を再考する機会を与えられた。コロナ禍における実習経緯については、児童

学専攻教員「2020年度コロナ禍における児童学科児童学専攻における実習についての報告」の「第3節 施設実習（3年次）」等に詳しく記述している^{[1][2]}。

さて、筆者の属する児童学科の特徴は、四年制大学と保育士養成校の二つの顔を併せ持つ点である。前者に着目すると、通説や答えのない課題に主体的に向き合う学びが求められ、後者に着目すると、必要な知識・技術・価値を兼ね備えた保育士になる学びが求められる。さらに、大学教育は講義・演習・ゼミ・実技・実験・実習など、多様

な形式で行われる。新型コロナウイルスによるパンデミックはオンライン授業を促進させたが、実践現場に身を置き、子どもや利用者、職員等と交流して学ぶ実習は、オンライン授業はもとより、他の学び方に代替できない性質をもっている。

それでは、一定期間行われる現場実習の学びをより効果的なものとするために、どのような実習指導が求められるだろうか。さまざまな手段が考えられるが、本研究では、施設実習における記録法に焦点を当てていく。その際に意識していきたい視点として、四年制大学における保育士養成、すなわち一人ひとりの学生が状況に身を投じ、主体的に考え、判断できる力の養成を念頭に置きながら、検討を進めていく。

1. 施設実習における記録法の現状と課題

1.1. 既存の調査結果と教科書の検討

(1) 国の基準とミニマムスタンダード

一般的に、保育士養成校において保育実習Ⅰ（福祉施設）はどのように位置づけられているのだろうか。厚生労働省雇用均等・児童家庭局長「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」には別添1として、指定保育士養成施設の教科目の教授内容が示されている。このうち、「保育実習指導Ⅰ（演習）」の目標のひとつとして、「4. 実習の計画・実践・観察・記録・評価の方法や内容について具体的に理解する」ことが挙げられ、保育実習Ⅰ（児童福祉施設等（保育所以外）における実習の内容）のひとつに、「記録に基づく省察・自己評価」と明記されている¹⁾。

こうした基準を踏まえ、全国保育士養成協議会は、保育士養成校における実習指導の標準化を図るために、『保育実習指導のミニマムスタンダード』を作成している。保育所とは少し異なる施設実習における記録の対象として、次のように記されている。

「保育所の場合、発達状況に応じた個々の子どもたちへの対応とクラス運営に目を向けて記述することが求められる。施設の場合は個々の利用者の行動上の特徴やその背景、その利用者に対する支援の方法に視点が向けられる。（中略）そのため日々の記録では、1日の流れよりも利用者の言動およびそれに対して実習生自身が何を考え、どのように行動したのかを詳細に記述することが求められる」。さらに、「施設的环境図を書くことで子

どもや利用者の生活状況について考える機会が得られたり、施設の沿革を調べることで施設がどのように構築されたかを考える機会となる」¹⁾。

続いて記録の意義として、次のように述べる。記録の「作成過程におけるふり返りを通して、保育理解、子ども理解、自身の実践の省察につながる。（中略）実習時間後に落ち着いた環境の中、ふり返りを行うことで、実習期間中は気づかなかったような観点を得ることができる。文書にして実習指導者に伝えることでさらに異なる視点から助言を得ることも可能となる」¹⁾。

以上のように、保育実習指導のミニマムスタンダードでは、施設実習における記録に際して、実習生は個々の子どもや利用者の言動や背景、支援方法に視点を向けることが求められ、記録という行為を通して自らの経験を表現するなかで、実習時間中には気づかなかった気づきを得る（省察）と同時に、それを読んだ実習指導者からの助言を得る機会にすることが示されている。

(2) 調査結果から確認できる記録の意義と課題

全国保育士養成協議会では、2018年に『保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究』報告書を発表している。そこで、本報告書に所収されている指定保育士養成施設の卒業学年学生（1092名）を対象とした質問紙調査の結果を参照しながら、施設実習における記録の意義と課題を確認していくことにする。以下、内容を要約して示していく¹⁾。

保育実習Ⅰ（福祉施設）の事前指導のうち、理解の難しかった項目として、「実習の自己課題の立て方」と「実習日誌の書き方」が明らかとなった。さらに、6割の学生が実習日誌を記述する負担感を感じている。但し、保育所の9割に比べると低い割合であった。一方で、実習日誌の記述に対する指導者の指導内容（コメント、口頭、添削）についての満足度は高く、8割の実習生が「満足」または「非常に満足」と回答していた。そして、8割弱の学生が実習日誌を書く経験を通じての意識変容を感じていた。

自由記述から確認できる意識変容の内容は、次のとおりである。「実習日誌を書くことにより1日の出来事を整理することが出来て、振り返ることができた」「振り返りができたこと。こうやって関わってこう、などと考え充実した実習になった」「普段関わる機会が少ない障害を持った方への接

し方を詳しく的確にアドバイスをもらうことができ、学びが深まった」「子どもの行動に関して疑問に思った点を質問するタイミングがなかった時に、日誌に記載することで職員からの見解を日誌を通して知ることができた」など、ふり返りの手段や実習指導の材料として用いられた点を確認できる。

報告書の最後の総合的考察では、次のようにまとめられている。学生に限らず養成校教員にも、「保育イコール保育所保育，保育士養成イコール保育所保育士養成という認識が強くみられ」る。しかし、保育土の実習施設は、「いわゆる施設実習に含まれる乳児院，児童養護施設，障害児入所施設（国立重度知的障害総合施設を含む），障害者支援施設，指定障害者福祉サービス事業所，児童発達支援センター，児童心理治療施設，児童自立支援施設，さらには児童相談所一時保護施設，児童館等々，子どもの福祉に関わる施設が非常に多く含まれている」。そのため、「保育土の本質的な専門性を学び深める上で，0歳から18歳未満までの子どもの成長・発達や子ども理解，支援または家庭養育環境，保育環境，社会養護環境等々をパースペクティブに把握することはきわめて重要である。さらに障害者入所施設の実習の意義についても，十分に考慮する必要がある。保育所実習と共に施設実習の重要性は極めて高い」。「18歳未満あるいはその周辺の子どもの等の保育の重要性を検討していくことは，保育士資格制度上もますます必要となってくるであろう」^[5]と締めくくられている。

言わば，施設実習には多様な福祉施設が含まれ，対象となる子どもの年齢も0歳から18歳未満まで幅広いことから，保育土の専門性を広い視野で見通すことができるようになるという役割が示されている。しかしながら，こうした意義はあくまでも乳幼児期の保育所保育土の専門性に軸足を置くものであり，施設実習固有の意義を示すには至っていない。さらに，指定保育士養成施設の学生に対する質問紙調査を通して明らかとなった，施設実習における「実習日誌の書き方」が難しいという声に，今後どう対応する必要があるのかという点も示されていない。

(3) 施設実習における記録法の特徴—保育士養成の教科書の検討を通して

保育士養成の指定教科目に対して，さまざまな

出版社が教科書を市販している。このうち，施設実習に関する記述が比較的充実している教科書を選び出し，記録法の教授内容を確認していく。取り上げる教科書は，岡本ほかによる『福祉施設実習ハンドブック』^[6]，加藤ほかによる『施設実習ガイド』^[7]，和田上ほかによる『ワークシートで学ぶ施設実習』^[8]，松本ほかによる『より深く理解できる施設実習』^[9]の4冊である。これらの共通点として，a.施設実習の実習先の多様性を反映し，施設ごとの特徴を学ぶことができることと，b.保育所実習とは区別した施設実習の記録法を記述している点である。

一方で，記録法の記述に認められる各教科書の特徴として，『福祉施設実習ハンドブック』の当該箇所は現場職員によって執筆されており，専門職にとっての記録の意味からその大切さを説き起している^[6]。『施設実習ガイド』は，保育所実習と異なる施設実習の特徴を明記したうえで，学びの連続性を媒介する記録の機能，すなわち，その日の目標や課題に即して事例を選び出し，ふり返り，明日の課題につなげていくはたらきを示している^[7]。『ワークシートで学ぶ施設実習』は，全国保育士養成協議会によるミニマムスタンダードに忠実に，それを発展させた内容によって構成されている^[8]。『より深く理解できる施設実習』は，多様な実習施設毎に記録のポイントと記載例が示されている^[9]。以上の各教科書における記録の目的と方法を整理したものが表1である。

市販の教科書に記載された，施設実習の記録法を一覧することによって，次のような点を確認することができる。「記録の目的」については，子どもの様子や保育土の職務などの把握に加え，自分の関わり方や感じ方に対するふり返りや気づきが含まれている。さらに，それらを用いて指導者と意思疎通を図り助言を得ることを意図している。

「記録の方法」に関しては，記録の形式として，時系列，事例，エピソード，考察，指導案等を確認できる。そして，こうした枠組みを用いて，子どもの活動や保育者の動きなど事実と，実習生自身の気づきを書くことによる学習の深まりを意図している。

表 1. 市販の教科書における施設実習の記録法に関する記載内容

	『福祉施設実習ハンドブック』	『施設実習ガイド』	『ワークシートで学ぶ施設実習』	『より深く理解できる施設実習』
記録の目的	<ul style="list-style-type: none"> 記録することによって、①確かな記憶としていつまでも残すことができるとともに、②子どもたちがどのような行動をし、③実習生としてどのようにかかわったのか、④それらを通して思ったこと、感じたこと、得たものを明確にし、⑤明日の実習課題などにつながること。 	<ul style="list-style-type: none"> その日の活動を振り返り、学びを整理することを通して、何ができて、何に課題が残ったのか整理する。 わからないことや確認したいことを記載し、職員とコミュニケーションを取る。 	<ul style="list-style-type: none"> 自身がどのように利用者を理解しているのか、その理解に基づいてどのような言動をしたのか、どのような言動が子どもや利用者にもどのような影響を与えたのか振り返り、考える機会となる。 文章にして実習指導者に伝えることでさらに異なる視点から助言を得ることも可能となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 保育士の職務を学ぶため 振り返りと客観的な理解のため コミュニケーションツールとして
記録の方法	<ul style="list-style-type: none"> 時系列〔対象児(者)の活動、援助者(保育士等)および実習生の活動〕 考察、反省 観察記録(個別グループ)のエピソード 	<ul style="list-style-type: none"> 時系列〔日課、子ども・利用者の活動、保育者(職員)の動き・配慮、実習生の動き・気づき〕 事例と考察、本日の学び、目標に対する振り返り、明日への課題 指導案(指導計画書)、手作りおやつ計画書、レクリエーション活動計画書 	<ul style="list-style-type: none"> 時系列〔その日の日課(一日の生活の流れ)、利用児/者の活動、職員による支援、実習生の活動・気づき〕 エピソード形式(特に印象に残った場面に関する事実(6W1H)と自らの気づき) 一日の振り返り、考察 	<ul style="list-style-type: none"> 時系列〔利用児(者)の活動、職員の動き、実習生の活動・気づき〕 実習生の活動内容(タイトルと主な活動) 気づいた点、感想と反省、印象に残っている出来事、考察(次への課題) 部分実習の指導案

1.2. 問題の所在

施設実習の記録法について、先行研究の検討からどのような課題を抽出できるだろうか。もっとも切実な課題として、全国保育士養成協議会による質問紙調査によって明らかとなった、施設実習における「自己課題の立て方」と「実習日誌の書き方」が難しいという学生の意見にどう応えていくのか、という点を挙げるができる。調査結果に、難しいと感じさせる要因は示されていないが、調査報告書の総合的考察では、施設実習の特徴として、保育所実習と異なり実習先として多様な福祉施設が含まれている点と、対象年齢も0歳～18歳(さらには、障害者支援施設等では成人を含む)まで幅広い点が挙げられていた。

施設実習についての記述の充実していた教科書では、おそらく、以上のような特徴を認識したうえで、施設毎に特色(施設の定義や目的、子どもや利用者の状況、職員の支援内容、実習の特徴、実習生の事例や日誌の書き方等)の説明が行われていた。したがって、学生は以上のような教科書を用いて自分の配属された福祉施設の概要を学び、当該施設に対する具体的なイメージを抱くことができるようになることで、自己課題の立て方や実習日誌の書き方に対する難しさを軽減させることができるかもしれない。

さらに、市販の教科書における施設実習の記録法の説明として、実習日誌に記録する際には、記録の形式(枠組み)として時系列、事例、エピソード

ード、考察、指導案等を用いて、子どもの活動や保育者の動きなど事実と、実習生自身の気づきを書くことの必要性について記載されていた。その一方で、以上のような内容は保育所実習の記録法と共通していることから、施設実習の記録法は保育所実習に対してどのような違いがあるのか、そもそも区別する必要はないと考えているのか、明記されていない。

それでは、施設実習の事前学習として、配属先の福祉施設の概要と、記録法（実習日誌の書き方）の基本について学習すれば、以上のような課題は氷解するのだろうか。それのみでは不十分ではないかと考えられる。学生が難しいと感じていた項目として、「実習の自己課題の立て方」と「実習日誌の書き方」の二点セットで指摘されたことに象徴されるが、その背景には、一人ひとりの学生が施設実習に行くことの固有の意義を十分に理解できていないという要因があるからではないか。

福祉施設は、専門職である保育士の活躍の場とは聞いているが、保育所とは別に設定された施設実習において、さらに多様な種類を含む福祉施設の中から偶然配属された実習先に、12日間身を置いて学ぶ意義とは何だろうか。それがあいまいに感じられるが故に、福祉施設で実習する上で自己の課題をどう設定するとよいのか、その課題に照らしてどのような経験をして、それをどう記録するとよいのか、という一連の取り組みを思い描くことを妨げているのではないか。

そして、全国保育士養成協議会の報告書で述べられていた施設実習の意義も、子どもの発達や支援内容について視野を広げるといった、言わば保育所保育士の学びを軸とする補助的・周縁的な視点に止まるものとなっている。なお、ここで言う周縁的なものとは、乳幼児期に対する学童期や思春期（中高生）、健常児に対する障がい児、通常の発達に対する凸凹のある発達、保育に対する養護や療育、家庭から通う子どもに対する親元を離れて暮らす子どもといったことを指している。

2. 研究目的と方法

2.1. 研究目的

これまでの検討をとおして、学生に対して施設実習に行くことの固有の意義を示したうえで、現場での学びを深めるための実習記録法を示すことが必要であることを確認することができた。そこ

で本研究は、保育士養成における施設実習の事前指導の教材として、施設実習における学びの固有性（どうして福祉施設で学ぶのか／何をどのように学ぶのか）と同時に、現場での学びの質を高めるための実習記録法（日誌の書き方）を明らかにすることを目的とする。

2.2. 研究方法

本研究は、筆者が保育士養成教育における施設実習の指導に携わるなかで、授業用に作成してきたテキスト分析を基盤としている。

第一に、実習先である社会福祉施設という場の特徴を分析することとおして、施設実習における学びの固有性を論理的に導き出すことである。

第二に、2021年度の「保育実習指導ⅠB」のために作成・活用した配布プリントの分析をとおして、施設実習の学びの特徴を考慮した記録法の教材を提起することである。その一環として、現場の実習担当職員（児童養護施設4か所4名、母子生活支援施設1名、児童心理治療施設1名、障害者支援施設1名の計6名）を対象として、実習生に求める記録内容に関するインタビュー調査を実施した。

2.3. 倫理的配慮

実習担当職員に対するインタビュー調査について、調査の趣旨と活用方法（戦略的個人研究費に基づく研究であり、分析の結果について、実習指導の授業で生かすことを考えていること）について説明し、同意を得たうえで実施している。合わせて、研究成果の論文にまとめる際には、守秘義務として職員の氏名や所属施設等が特定されないようにすることを伝えている。

3. 施設実習の学びには、どのような特徴があるのか—施設実習の学びの固有性—

「保育実習Ⅰ」は保育士資格の必修科目であり、保育所実習と施設実習の二つの現場実習によって構成されている（実習時間はそれぞれ90時間以上である）。今回分析の対象とするのは、「保育実習Ⅰ」における施設実習である。施設実習は保育所実習と異なり、実習先に多様な社会福祉施設が含まれている。

具体的には、「社会的養護系の福祉施設」として、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、児童

心理治療施設、児童自立支援施設等、「障がい者福祉系の福祉施設」として、福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害者福祉サービス事業所等である（なお、両者には重なりも見られ、児童養護施設には発達障害とされる子どもの割合が増加しており、障害児入所施設には、虐待等により親元に戻ることに難しい子どもも多く入所している）。

以上のような福祉施設のうち、学生は一種類の施設に配属され、実習に臨むことになる。現場実習において、学生は何をどのように学ぶことが求められるのか。施設実習の学びの特徴について、その目的と学び方に分けて考えていく。

3.1. 福祉施設実習の目的とは

先述したように、施設実習は保育所実習と一組になって保育実習Ⅰを構成している。そこで最初に、二つの実習の共通点に着目して、施設実習の目的を導き出していく。主として二つの共通点が考えられる。一点目は、いずれの実習も、保育士になるための実習であることから、保育士の専門性について学びを深めるといふ点である。保育所実習では保育所保育士の専門性、施設実習では施設保育士を含むケアワーカーの専門性である。二点目は、いずれも児童福祉法に規定された児童福祉施設（あるいは、社会福祉法に規定された社会福祉施設）である。そのため、子どもや利用者の生活のセーフティネット機能を担う、児童福祉施設（社会福祉施設）としての保育所および福祉施設のはたらきについて理解を深めることである。

こうした視点を考慮して、本学では保育実習Ⅰ（福祉施設）の学びの一般的目標を以下のように示している。

- ① 施設理解…それぞれの福祉施設の養育理念や機能、生活を支える環境や仕組みなど、社会福祉施設のはたらきについて、施設の職務や活動への参加学習を通して正しく理解する。
- ② 専門職理解…子どもや利用者の人権を守り、生活や育ちを支えるために、保育者や支援員はどのような役割を担っているのか、専門的な職務と援助内容、職業倫理等を理解する。
- ③ 利用者理解…子どもや利用者に関わり合い、生活リズムや発達過程、ニーズに加え、一人ひとりの生活経験や気持ちに接することで、人間の尊厳を含む子どもや利用者への理解を深める。

- ④ 自己課題と向き合う…福祉施設に身を置き、子どもや利用者、現場職員との交流をとおして、自身の言動や価値観等を省察し、自己覚知（self-awareness）や自己洞察（self-insight）を進める。

以上のような4つの学びの視点は、各学生が事前に策定する実習目標や実習後に記入する自己評価シート、さらに実習先に提示している実習要項と評価表の「枠組み」にも連動させている。

さて、以上のような目標が掲げられているにも関わらず、どうして学生は「自己課題の立て方」（さらに「実習日誌の書き方」）について難しいと感じているのだろうか。

施設実習先には多様な福祉施設が含まれているが、各学生はそのうちの一種類の施設に配属されることになる。配属先によって、「おとなしきくない施設で何を学ぶとよいのだろうか」といった不安や、「今のところ施設への就職は考えていないが、決まりだから行く」といった後ろ向きの姿勢を惹起させる可能性もある。そのため、一人ひとりの学生が施設実習に積極的に臨もうと考える、施設実習ならではの学びの意義を提起する必要があると考えられる。本学では次のような視点を示している。

福祉施設で生活している子どもや利用者の多くは、障がい（身体・知的・発達・重症心身等）のある子どもや利用者であったり、さまざまな事情（虐待・貧困・非行…）によって親元から保護された子どもや利用者であったりする。多くの学生は、これまで施設を訪問したり、利用者と関わる機会はほとんどなかったと考えられ、子どもや利用者と出会うことに不安を感じたり、何らかの先入観を抱いているかもしれない。

さて、わたしたちはこの世に生まれてくるとき、どのような場（例えば、家族や地域、時代等）に、どのような心身を抱いて生まれてくるのか、誰一人として選び出すことはできなかった。言ってみれば、誰もが偶発的な存在なのであり、その意味で、実習生であるあなた自身と施設で生活する子どもや利用者は、決して無関係ではないのである。なぜなら、あなたが彼ら・彼女らであったかもしれず、彼ら・彼女らがあなただったかもしれないのだから。しかし、実際にはそれぞれ別々の人生を歩むことになり、あなたは施設実習という場で彼ら・彼女らと出会うことになる。さらに、子どもや利用者と共に寄り添い、生

活を支える職員とも出会う。

出会うという経験は、これまで遠くに感じていた存在と身近に接することを意味する。さまざまな身体的感覚（視覚・聴覚・触覚・嗅覚等）を用いて、相手の存在を感じ取る。出会うことで、相手のよりリアルな姿に触れることが可能になる。目の前にいる子どもや利用者は、どのような状況の中で、どんな思いを抱きながら生きてきたのか。そして今、施設とつながることで、どのような環境に身を置き、どんな気持ちで暮らしているのか。さらに、福祉施設における職員は、どのような思いで子どもや利用者を見守り、生活を支えているのか。

わたしはあなただったかもしれないという思いを抱きながら、目の前にいる他者との出会いを経験することで、固有名をもつ一人ひとりの存在のかけがえのなさに気づかされる可能性がある。すなわち、一人の人間が生まれ、生きて、死んでいくことに、敬意を抱くことである。その結果、先入観を含む自己の価値観の見直しや、自他をリスペクトする姿勢などにつながっていくのではないかと。しかし、そのためには、あなた自身が相手とどのように関わることかという点が問われてくるのである。

以上のような学びをどのように名づけることができるのか。それは、一人ひとりの人間存在とその生活のかけがえのなさを学ぶという意味で、「人間の尊厳」についての経験的・実践的学びと表現できるのではないかと。人間の生活(Life)には生命・暮らし・人生という複合的な意味が含まれているため、人間存在と生活は表裏一体の関係にある。

生活を支えることはたいへん尊い行為である。作家の高橋源一郎は戦争小説の分析をとおして、過去の日本の戦争行為に、『思想』で抵抗した人たちの多くは、どんなに抵抗しても、突然、あっさり『転向』していった」一方で、最後まで抵抗できたのは、「それぞれの『平時』を、それぞれの『日常』を、大切に思える人だけだった」と述べている^[10]。

こうした視点は、保育士を含む対人援助やケアワークの専門性の土台にあたるものであり、施設実習においてこそ学びを深めることが出来ると考えられる。しかし、こうした学びは一朝一夕に実現できるものではない。どのように学ぶのかということによって、大きく左右されるのである。

3.2. 施設実習においてどのように学ぶか

実習という学び方に関する一般的な特徴から確認していく。大学教育は講義・演習・ゼミ・実技・実験・実習など、さまざまな形式で行われる。このうち実習とは、現場に身を置き、実際に活動すること、すなわち実践や経験をとおして学ぶことである。学生には、施設実習で取り組む活動について、次のように伝えている。「社会的養護に関わる福祉施設や、障がい児・者の支援に関わる福祉施設等の実践現場に身を置き、子どもや利用者、専門職(職員)との交流を通して学ぶことになる。実習生は子どもや利用者の生活を支える幅広い職務内容に取り組み、コミュニケーションを工夫して子どもや利用者とは丁寧に向き合うことが求められる。現場で知識を確認してくるのではなく、思考や心身を働かせながら、先述した福祉施設理解・専門職理解・利用者理解等を目途として、保育士を主とするケアの仕事に多面的に取り組む」。

しかし、実際に実習できる時間は12日間(90時間)と限られているため、いかにして「経験の質」を高めるかということが問われてくる。保育実習の学びは現場にいるときのみならず、事前学習・現場実習・事後学習によって構成されている。そのため、それぞれの段階において経験の質を高めることのできる学び方の工夫が求められる。

事前学習の段階では、当然のことながら、自分の行く福祉施設に関する基本的知識を学んでおく必要がある。なお、実習先が多様であることに加え、学生にとって馴染みが薄いことから、文献資料のみならず、映像資料も用いながら、各施設についての具体的なイメージを思い描くことができるとよい。その意味では、現場における事前オリエンテーションも貴重な学びの機会である。

その一方で、例えば、障がい、虐待、貧困、非行等に関する表面的知識は、かえって学生に対して、利用者を自分と異なる特殊な存在であるという印象を抱かせ、自然体に関わることを抑制・阻害する結果を招く可能性もある。こうした意味でも、子どもの権利や人権に関する学びを欠かすことはできない。

さて、施設実習の目的は、福祉施設のはたらきや保育士等ケアの仕事の専門性について学ぶことに加え、一人ひとりの人間存在とその生活の尊さを意味する「人間の尊厳」について、学びを深める機会であることを確認してきた。こうした目的

を実現するために、現場実習の段階ではどのような学びが求められるのか。ここでは二点指摘しておくことにしたい。

一点目として、現場に身を置き、一人ひとりの人間（個人）のリアルな姿（reality）に触れることである。すなわち、目の前にいる子ども（または利用者）は、どのような状況に身を置き、どんな活動をしながら、どのような気持ちで生活しているのか。そして、現場の職員は、子どもや利用者の生活（生命・暮らし・人生）を支えるため、どのような思いで仕事をされているのか。

こうしたリアルな姿に触れるには、学生自身の動き（学び方）が問われてくる。目の前にいる個人と関係をつくり、交流することを不可欠とするが、それは決して容易にできることではない。相手は障がいによってコミュニケーションが困難であったり（例えば、発話の困難等による表現の弱さ、発達凸凹や個性の強さによる情報処理の特殊さなど）、これまでの成育歴から他者への不信感や恐怖心を抱いているかもしれない（例えば、被虐待による傷つきなど）。さらに、相手が育ちや支援の途上にあることに十分配慮して関わる必要がある。また、そもそも相手を尊重するとは、その人自身の生き方や思い出（さらに秘密）に対して、慎み深い態度で接することを意味する。

二点目として、実習におけるさまざまな活動に対して、受け身ではなく、主体的に取り組むことである。どうして主体的に取り組むことが、経験の質を上げることにつながるのか。受け身で取り組むことの例として、指示を受けて動く・マニュアル等に沿って動くという方法がある。しかし、活動の規準として指示やマニュアルが心の中を占めるようになると、目の前にいる相手の存在より、指示内容に注意を払うことになり、実習生自らその場の状況を捉え、判断することが二次的となる恐れがある。子ども支援の専門性とは、子どもや保護者の置かれたリアルな状況（例えば、子どもは今どのような状況において、どのように行動し、どのような気持ちでいるのか）を把握し（気づきのセンサーや、聴く／聞くこと、現実に根ざした想像力等を駆使して），“子どもの最善の利益”，すなわち、目の前にいる子どもにとって何がもっとも望ましいのか考え、対話し、判断・行動し、それらを省察し、フィードバックしようとするのである。

実習においても、以上のような主体的な動きを実習生として経験できることが大切だが、指示やマニュアルに囚われてしまうと、こうした動き（思考や感情等を含む心身を自らはたらかせること）が免除され、結果として、経験の質が下がることになるのである。その一方で、自ら考え、判断し、行動することは難度の高い行為であると同時に、それは自分本位で動くことを意味しないため、必要に応じて指導を仰ぐこと、見習うことも重要な判断内容に含まれることを付け加えておきたい。

事後学習の段階としては、多様な実習先を混合したグループによる事例検討を取り上げることにする。事例検討の学びのどのような点に、経験の質を高める契機が含まれているのか。

一点目として、報告するための事例をまとめるために、改めて自分の経験に向き合う機会になるからである。わたしはあの時、どのような場面において、身体的・精神的機能をどのようににはたかせ、何を捉えたのか。どのようなものの見方になって、どのように判断・行動し、その結果として、どのような反応と出会ったのか。もたらされた他者の反応から、そこに至るまでの自身の一連の行動をふり返ると、どのようなことに気づかされるのか。

二点目として、事例検討のプロセスには、自他の経験と向き合う、いくつもの局面が含まれているからである。さまざまな経験を吟味し、報告する事例を選択すること。経験に言葉を与える（書く）こと。問いや論点を導き出すこと。自分の事例を話す／他者の事例を聴くこと。質疑応答すること。事実を確認し合い、イメージを共有すること。多面的に検討し、話し合うこと。さらに、こうした事例検討の前提として、倫理的配慮に関する学びを深める契機にもなる。

さて、報告事例をまとめる際には、実習日誌の記録を活用することが求められる。実習中に、何をどのように記録してきたのか、という点が問われてくる。そこで以下では、実習経験の質を高めるための記録の方法や技術に焦点を当てていく。

4. 実習経験の質を高めるために、記録はどのようなはたらき（機能）をもつのか

4.1. 現場の実習担当者は記録に何を求めているのか

先行研究の検討から、実習日誌の記録の目的のひとつとして、現場職員とコミュニケーションを取り、助言を得ることであることを確認してきた。

それでは、現場において実習生を助言・指導する立場にある職員は、どのような記録内容を求めているのか。表2は、施設実習の実習担当職員7名に対して、「実習生が日誌に記録する記録内容として、もっとも大切にしてほしいこと」についての聞き取り調査の結果である。

表2. 現場職員が実習生に求める記録内容

<ul style="list-style-type: none"> ・記録は自分と向き合い、嬉しい・悲しいといった自分の思いや気持ち、感情の動きを書くことよと思う。自分がどうみられているか気にしている人も多いが、自分の感じているしんどい思い、そのこと自体を書くことよいのではないか。(児童養護施設A)
<ul style="list-style-type: none"> ・実習におけるその時の思いを書き、後で見返した時に、役に立つものとなるように書いてほしい。(障害者支援施設)
<ul style="list-style-type: none"> ・時系列に沿って、先生の動き・子どもの動き・自分の動きを書く人が多いが、それはほんとうに必要なのだろうか。それは大変じゃないだろうか。きりがいいのではないか。それよりも大事なことは「自分の考え」であると思う。今日の実習で何を感じたのか、疑問は何か。何に興味があったのか。本来、何も感じていないなんてことはないと思う。ぜひ伝えてほしい。そうするためには、いかに実習で吸収していくのが大事。そこから職員とのやり取りがはじまる。成立する。職員とのやり取りをしてほしい。(児童養護施設B)
<ul style="list-style-type: none"> ・第一に、自分の思いが語られているノート。それにプラスして、高校生の女儿との関わりで苦勞したとすれば、その時の「自分の大変さ」に加え、職員などその時に「一緒にいた人のことも」書けること。その人はそれをどう見ていたのか。高校生に対して、その人の思いや実際の関わりを記録することができるとよい。その結果、一つの様子に対して、他人からの見方、自分以外の人の見方も知る。(児童養護施設C)
<ul style="list-style-type: none"> ・第一に、自分がしていたことと、自分の思いや感じたことを直接書くこと。第二に、誰が読むのかを意識して書くこと。第三者の視点を意識することも大切。そのあたりがあいまいな時は、それはあなたの思いなのか、職員の考えなのか、どっちなのかと聞いている。そして、次どうするか、につなげていく。(児童養護施設D)
<ul style="list-style-type: none"> ・決められたフォーマットではなく、自分で決めることができるとよいのでは。大妻女子大学の児童学科は自分で決めることができる。フレームのみ示し、学生に委ねていく。1日の目標を立てすぎたり、想定し過ぎないことも大事。目標は少しおおざっぱに。そして、取り組む中で、何にどうして引っかかったのか挙げて、考えていく。 <p>記録の流れとして、時系列(タイムスケジュール)で、子ども・職員・自分についてそれぞれ記述する。そして今日1日の中でポイント、ピンときたことについて、1つでも2つでもエピソードで書くことよ。状況を書き、引っかかったことを書く。自分はどうしてそこに引っかかったのか。どうしてそこにフォーカスを当てたのか(理由)。そこから得た学びとは。(児童心理治療施設)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・観察結果ではなく、感情を言語化してほしい。感情をおざなりにするとバーンアウトしてしまう。それを防ぐためにも、実習の中でやっておくことが大事。ネガティブな思いを含め、腹が立ったこと・嫌だったことも、人のことのみならず、自分自身のことも表現していくことが何より大事。(母子生活支援施設)

実習生に求める記録内容として、すべての職員に共通していたことは、実習生自身の心の中で起きていることを書いてほしいということであった。具体的には、「嬉しい・悲しいといった、自分の気持ちや思い」「感情の動き」「自分の感じているしんどい思い」「その時の思い」「自分の考え」「何を

感じたのか」「疑問」「興味」「自分の大変さ」「自分の思いや感じたこと」「ピンときたこと」「引っかかったこと」「ネガティブな思いを含め、腹が立ったこと、嫌だったこと」「感情」等である。

さて、心理学者のC.G.ユングは、心の活動形式として、思考(thinking)、感情(feeling)、感覚

(sensation), 直観 (intuition) という, 4つの機能を挙げている^[11]. Tom Andersen は, 「関係するということは, 感じる (sensing), 知る (knowing), 行う (acting) ことから成り立っている」と述べている^[12]. ユングの分類のうち, 実習担当職員が実習生に対して記述してほしいと考えている心の機能として, 感情に関する心の動きが多いことに気づかされる. どうして真っ先に感情を挙げたのだろうか. 次のような理由が考えられる.

一点目の理由は, 「感情をおぎなりにするとバーンアウトしてしまう. それを防ぐためにも, 実習の中でやっておくことが大事」と明確に述べられている. 施設保育士は子どもや利用者の育ちを支えるために, しばしばその悲しみや苦しみに向き合うことになる. その結果, 知らず知らずのうちに共感性疲労が蓄積され, 燃え尽き症候群に陥ることを避けるために, 感情を吐露する必要性が示された.

二点目としては, 4つの心の機能のうち, 感情はその人自身の主観的な心の動きを率直に表すものだからではないか. 建前の言葉に止まらない, 実習生自身の心の中に生じた率直な思いが表現されてこそ, より深い話合いや「職員とのやり取り」が可能になると考えられる. それを契機に, どのような話し合いが始まることになるのか. この点も職員の言葉に示唆されている.

ひとつは, 「どうしてそこに引っかかったのか. どうしてそこにフォーカスを当てたのか」など, 自分の思いや考えの背景にある経験や物の見方など, 自己を掘り起こすという方向である. いまひとつは, 「その人はそれをどう見ていたのか」「それはあなたの思いなのか, 職員の考えなのか, どちらなのか」「一つの様子に対して, 他人からの見方, 自分以外の人の見方」など, 自分の思いや考えに対して, 他の人はどう思ったのかを知るなど, 言わば, 自分の視野を広げるという方向である.

実習生の現場経験の質を高めるうえで, 現場職員とのやり取りは重要な要件であるが, そこでのやり取りをより効果的なものとするために, 実習生は自身の心 (感情や思考等) の動きを日誌に表現 (記述) することが必要であることを確認することができた.

4.2. 経験の質を高めるための記録の機能

これまでの考察をふり返り, 実習経験の質を高めるための記録の機能について, ひとつの見解を

示していきたい. まず, 社会福祉施設という学びの場の特徴を踏まえ, 施設実習における二通りの学びの目標を導き出してきた. これらの目標のうち, とりわけ一人ひとりの人間存在と, その生活のかけがえのなさを意味する「人間の尊厳」について学びを深めるには, 現場における経験の質を高めることが必要になってくる. そして, 限られた実習時間の中で, 経験の質を高めるには, 子どもや利用者のリアルな姿に触れることと, 受け身ではなく主体的に取り組むことが求められる. しかし, こうした動きは自律した専門職に求められる動きと共通しており, 容易に実行できるものではない. どのようにすれば, 実習生の努力を支えることができるのか.

そのための一つの手段として, 実習記録 (日誌の記入) を位置づけることができる. どうして記録にこうしたはたらきが期待できるのか. 改めて先行研究をふり返ると, 記録の目的として, ①その日の活動をふり返り, 整理することと, ②職員とコミュニケーションを取り, 助言を得ることの二つの機能が示されていた. こうした記録のもつはたらきを増進することで, 実習生の現場経験の質を支えることができる. どういうことだろうか.

まず, 記録について, 前者の機能に関して阿部和子は「日誌を書くことは今日の行動の軌跡を意識することである. その作業そのものが考えることであり, 明日どうしようかという行動の見通しを持つことである」と述べている^[13]. 記録という行為は, その日の活動 (過去) をふり返るだけではなく, その作業をとおして明日の見通しをつくり出していくことを示している. 別言すると, 実習における記録は, 今日の活動を省察 (reflect) し, 明日の活動にフィードバック (feedback) していく, 実習の連続性を確保する結節的なはたらきを担っている. 実習生はこうした記録の機能を意識し, 活用することによって, 自分自身と向き合いながら, 実習に主体的に取り組むことを後押しする.

次に, 後者の記録における職員とのコミュニケーション機能についてはどうだろうか. 実習担当職員に対するヒアリング結果として, 職員が実習生の記録に求める内容として, さまざまな感情の動きを含む, 実習生自身の心の中で起きていることを表現してほしい, ということが明らかになった.

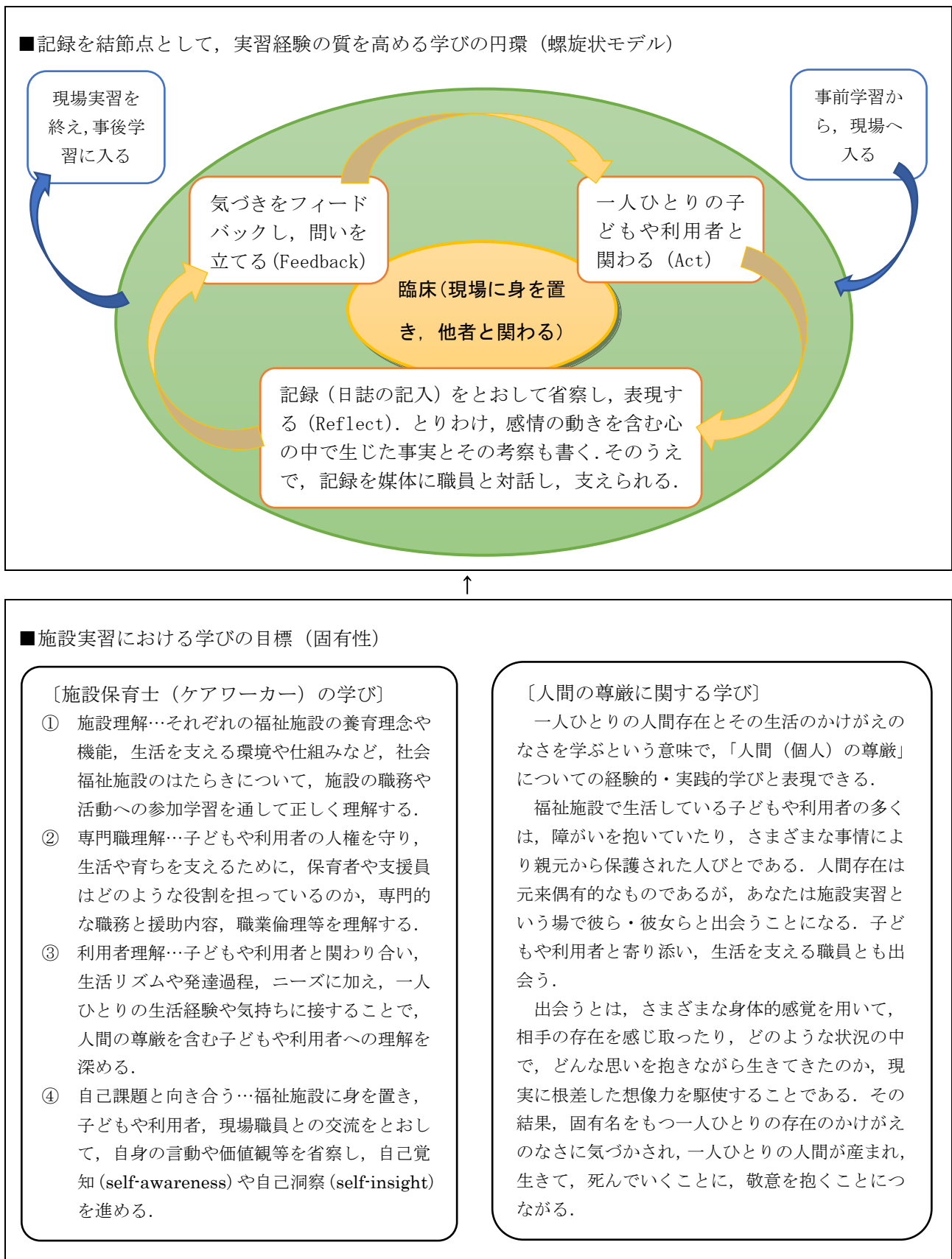


図1. 実習経験の質を高めるための螺旋状モデル

そこには、職員とより深くコミュニケーションを図るきっかけとして、さらに実習生が共感性疲労や燃え尽きに陥ることを支えたいという意図が込められていた。職員がぜひ伝えてほしいと考えることを実習生が日誌に表現することができれば、職員との対話やサポートが活性化され、実習経験の質を高めることができると考えられるのである。

施設実習における学びの目標（固有性）に対して、それらを記録の機能を結節点として、実践活動（act）→省察（reflect）→フィードバック（feedback）という円環を通して実習経験の質を高めるモデルとして図示したものが、図1「実習経験の質を高めるための螺旋状モデル」である。

5. 施設実習の特徴を踏まえた記録の方法（日誌の書き方）とは

図1に示した考え方を基盤として、記録のもつはたらきを増進させるためには、どのように日誌を書くか、記録の方法について具体的に示していくこととする。

5.1. 書き方の視点

施設実習の特徴として、実習先となる福祉施設が多様であることと、施設実習ならではの学びの目標があることを確認してきた。後者の目標を目指すには、実習生が子どもや利用者に関わり、そこで生じた心の動きを含む自らの経験と向き合うことが必要となる。そのため、どのような日誌（実習録）の書き方が求められるのか。以下では、①実習先、並びに生活内容の多様性を考慮して書くこと、②感情の動きを含め、心の中で起きていることも書くこと、③現場実習の主體的な表現手段として日誌を用いることの3つの視点に分けて、述べていくことにする。

(1) 実習先、並びに生活内容の多様性を考慮して書くこと

施設実習の実習先には多様な社会福祉施設が含まれている。そのため、施設の種類によって、例えば沿革、理念や目的、子どもや利用者の年齢や背景、居室等の環境、生活内容、職員配置、さらに保育士や支援員の職務内容等に違いが認められる。子どもや利用者の生活支援を表す用語についても、施設によって、養育、保育、養護、療育、自立支援、教護、更生等異なっている。また、福

祉施設は生活の場であるため、生活の場面も、日常生活における調理・食事、遊び、登下校、学習、余暇、作業・仕事、入浴、排泄、掃除、洗濯、睡眠、起床等、さらに誕生日会や旅行、クリスマス等の行事に至るまで多様である。さらに、子どもや利用者に関わる際には、年齢、利用の背景、障がいの違い等を考慮したコミュニケーションも求められよう。

そのため、以上のような生活場面や生活（支援）内容、活動内容、コミュニケーション等関わりの違いなどを考慮し、それぞれの内容をもっともよく表現できる記録法を選択して、用いていく必要がある。用いていく記録法としては、時系列、エピソード、逐語体、考察、子どもや利用者個々人の個性や特徴、支援の目的や方法、自分自身の特徴（言葉遣いやしぐさ、人間観他）に対する気づき、保育や支援の特定の場面の様子（日中活動・食事など）、保育や支援の技術（養育・介護、コミュニケーション技術など）、指導案（個別・部分・責任など）、図式法（居室の環境図などを図で記録する方法）、指導者（職員）や巡回教員の助言内容の記述などが考えられよう。

(2) 感情の動きを含め、心の中で起きていることも書くこと

実習生の心の中で起きていることとは、具体的にどのようなことであり、それをどのように書くとよいのだろうか。実習担当職員がそれをぜひ書いてほしいと述べた理由として、従来それが十分表現されていないという思いがあったということも考えられる。

さて、記録には一般的に「事実」と「考察」（さらに、考察の前提として事実の分析）が含まれている。このうち事実は、いくつかのレベルに分けて捉えることができる（表3）。第一に、保育実習で用いられる観察実習に対応する「観察レベル」であり、実習生が観察して捉えた事象である。第二は「参加（活動）レベル」であり、視覚のみならず、聴覚、触覚、嗅覚、言語を含む多様な身体的・認知的機能を用いて活動して捉えた事象である。これらの事実を正確に書く枠組みとして、6W1H（When, Where, Who, Whom, What, Why, How）を用いることが有効である。

そして第三に、観察や参加することで起きた実習生の心の動きであり、これらも「意識レベル」

で生じた事実として記録する必要がある。意識レベルで生じる心の動きには、先述したように、思考 (thinking)、感情 (feeling)、感覚 (sensation)、直観 (intuition) 等が含まれる。記録する際には、

物事が生じた状況を書いた上で、「～と考えた」「～と感じた」「～と思った」といった書き方が求められよう。

表 3. 記録における事実と考察

事実 (3つのレベル)		考察
【観察レベル】 観察したこと (6W1H)	【意識レベル】 観察や活動をとおして起きた心の動き (感情・思考・感覚・直観等)	観察内容や活動内容と、それらに伴う自分の心の中の動きを、何らかの参照点を用いて振り返ること。
【参加レベル】 活動したこと (6W1H)		

こうした書き方の技術も重要であるが、その前提として、実際に現場において心を動かす経験をする必要がある。どうすれば心は動くのだろうか。自分の中に閉じこもり、殻に覆われていては、心は動くことはないであろう。自らの身体を用いて他者と向き合い、自分のなかにいろいろな存在を招き入れることではじめて心は動き始める。こうした行為は、今までの慣れ親しんだ自分が揺さぶられてしまうかもしれないという意味で勇気のいる行為であるが、それを思い切って試みることで心は動き始めるのではないか。自分の中に多様な他者の視点をもつとはどういうことだろうか。社会学者の真木悠介は「方法としての旅」という短い文章の中で、次のようなことを述べている。

「2人の旅、集団の旅において、みちづれとしての他者は、世界を現前せしめる主体のまなざしの一部であり、世界を開示する主体の行動の一部である。子供をつれた旅である時、私は子供の目でもまた世界をみる他はない。歩けない人といっしょの旅である時、私は歩けない人の身体感覚でもまた世界を感覚してみる他はない。一つの都市、一つの駅は、1人の自由な旅の時にはけっして見せることのない相貌を見せ、けっして聞かせることのない言葉を発して、さまざまな施設や商品の存在や非在、さまざまな人の冷淡さやあたたかさとして開示されてくる。

同行は〈汝〉であるよりもまえに、まず〈我〉である。『同行二人』ということは、わたしが2組の目をもって遍路することである。集団の旅において私は、たくさんの目をもって見、たくさんの皮膚をもって感覚し、たくさんの欲望をもって行動する。そして世界は、その目と皮膚と欲望の多様性に応じて、重層する奥行きをもって現前し、

開示される。

関係のゆたかさが生のゆたかさの内実をなすというのは、他者が彼とか彼女として経験されたり、〈汝〉として出会われたりすることとともに、さらにいっそう根本的には、他者が私の感覚であり、私の感受と必要と欲望の奥行きを形成するからである。他者は三人称であり、二人称であり、そして一人称である」^[14]。

現場実習に赴くことは、旅に似ているのではないか。いろいろな他者がいる。他者と出会い、関わり、交流することで、自分のなかに他者の視点を取り入れてみる。それは、馴染みのある今までの自分とは異なるものであるからこそ、感情が揺さぶられ心が動き始める。わたしの中にたくさん目やたくさんの皮膚が培われ、それとともに想像力も増し、目の前に広がる世界に「重層する奥行き」^[14]が与えられていく。そして、あなたの隣には、「私とは異なった目で、私とおなじ世界を、私とは異なった視覚から見ることによって、私の世界を豊饒化してくれる他者」^[14]である職員もいる。

(3) 現場実習の主体的な表現手段として日誌を用いること

主体的に書くというとき、二つの視点から考えておくとよい。ひとつは、記録という行為は、主体的な実習の学びである実践活動 (act, practice) →省察 (reflect) →フィードバック (feedback) という円環を回していくうえでの、ひとつの結節点であることを示してきた。自分の問い (自己課題) を立て、その問いを念頭に置いてその日に活動し、問いに対してどうだったのか振り返り、事実と考察を記録し、記録を通して新しい明日の問い (自

<p>・保育者や支援員による幅広い職務の一環として、掃除や洗濯業務の方法と子どもや利用者にとっての意義を理解する。</p>	<p>・掃除や洗濯などは、いつ、どのように行われているのか。あなた自身どのように、それらの職務に取り組んできたのか。掃除をする場所（共用スペース、トイレ・浴室、居室、台所…）、掃除や洗濯の方法、洗濯の分量、興味深かったこと、たいへんだったこと。さらに、仕事に取り組んでいるときに、子どもたちが話しかけてきたとしたら、どのような会話が展開されたのか、活動しながら関わることの意義など、考えてみるとよい。</p> <p>また、掃除や洗濯は決して雑務ではないこと。施設において子どもや利用者の生活や育ちを支え、子どもや利用者が安心して生活するために、どのような意義があるのか考えてみるとよい。</p> <p>あなた自身が掃除や洗濯をしてみて感じたこと（「きれいになって、気持ちがいい」等）を基に考えてみるとよい。さらに、子どもや利用者が、自分たちが大切にされていることを実感することにつながるかもしれない。子どもや利用者に対して直接かかわる仕事のみならず、こうした間接的な職務内容の大切な意義について、体験をとおして考えたことを記述するとよい。</p>
<p>・障がいのある子どもたちが楽しめる「ミニお楽しみ会」の企画と実践（部分実習）。</p>	<p>・障がいのある子どもたちの身体的な特徴は何か、障がいのある子ども（障害の種類はもとより、一人ひとり異なる）は周囲の状況や環境をどうとらえているのか、どのようにすると活動しやすいのか、どのようなコミュニケーションの仕方を求めているのか、職員は普段どのような関わりや活動を実践されているのか、観察したり助言を受けたことをまとめておくとよい。</p> <p>そのうえで、指導案を作成するが、ねらいや進め方だけでなく、とくに配慮すべき事柄なども丁寧に書いておく。</p> <p>実際にやってみて、子どもや利用者の様子はどうだったのか、取り組んでみて難しかったこと、うまくいったことは何か（どうしてうまくいったのか）、職員からもらった助言等を記録しておくとういのではないかな。</p>
<p>・日中活動（作業所）の内容と、利用者にとってのやりがいと支援内容について理解する。</p>	<p>・障害者支援施設等では日中活動（作業・余暇活動、運動、クラブ活動等）が行われている。どのくらいの時間、どのような活動に取り組んでいるのか、その時の利用者の様子や職員の関わりについて記録する必要がある。そのうえで、以下のようにさらに深く体験を捉え、記録するとよいのではないかな。</p> <p>Aさん・Bさんなど、一人ひとりの利用者に着目し、どのような気落ちで、どのような様子で、活動しているのか。あなた自身は、どのように声をかけたり、関わったのか、それに対してどのように応じてくれたのか。ひとり一人の利用者の方は、どのような思いで活動に取り組んでいるのか。障がいのある人に対して、あなたはかつてどのように感じていたのか、どのような経験をとおして、どのように意識や考えが変化したのか。</p> <p>職員は、利用者に対するどのような支援目的を掲げ、活動を選び出し、体験の機会をつくり出しているのか。活動のために、どのような準備作業に取り組んでいるのか。利用者のやりがいや生きがいを高めるために、活動内容や言葉かけなど、どのように工夫しているのか。</p>
<p>*他にも、その日の目標に即して質問したこと（「子どもと関わっていたときに、～の言動が気になったのですが、どんな理由で入所されたのでしょうか」と質問したら、「～」と答えてくれた。それに対して、わたしは「～」と考え、～な関わりを工夫するようにしたなど）・反省会で質問したことと、答えていただいた助言。・職員に対して、どのようなきっかけでこの仕事をするようになったのか、仕事のやりがいなど、休憩中に現場で聞いた話を記録してもよい。・子どもの視点に立った歯磨きの仕方、おむつ交換や沐浴の仕方、健康管理や安全確保の方法などを記載してもよい。</p>	

おわりに

本研究では、主に2021年度における施設実習指導で用いたテキスト（オリジナルの配布資料）の分析・考察をとおして、施設実習における学びの固有性と、実習目的を実現するための記録法について考えを深めることで、従来のテキストのバージョンアップ（開発）につなげるという成果を導

き出すことができた。一方で、こうしたテキストを用いた実習指導に取り組むことによって、実習生自身がどの程度学びを深めることができたのか、教育の効果測定に関する研究が求められるが、この点は次なる課題としたい。

謝辞

本研究は 2021 年度大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号 S2107）による研究成果となります。この場を借りて感謝申し上げます。

引用文献

- [1] 大妻女子大学児童学専攻教員. 2020 年度コロナ禍における児童学科児童学専攻における実習についての報告. こども臨床研究. 大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター, 2022, 9, pp.21-58.
- [2] 大妻女子大学家政学部児童学科. 保育実習 I（福祉施設）実習報告書, 2022, 34, p.2.
- [3] 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長. 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（2022.8.31 一部改正）. 厚生労働省, 2002.
- [4] 全国保育士養成協議会編 a. 保育実習指導のミニマムスタンダード—「協働」する保育士養成. 中央法規, 2018, p.89.
- [5] 全国保育士養成協議会 b. 平成 29 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）—保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究. 全国保育士養成協議会, 2018, pp.244-245.
- [6] 岡本幹彦ほか.（三訂）福祉施設実習ハンドブック. みらい, 2011, p.56.
- [7] 加藤洋子ほか. 事例を通して学びを深める施設実習ガイド. ミネルヴァ書房, 2018, p.31.
- [8] 和田上貴昭ほか. ワークシートで学ぶ施設実習. 同文書院, 2020, p.26.
- [9] 松本峰雄ほか. より深く理解できる施設実習—施設種別の計画と記録の書き方. 萌文書林, 2015, p.108.
- [10] 高橋源一郎. ぼくらの戦争なんだぜ. 朝日新聞出版. 2022, p.336.
- [11] 河合隼雄. ユング心理学入門. 培風館, 1980, p.47.
- [12] Tom Andersen. The Reflecting Team : Dialogues and Dialogues About the Dialogues. New York : W.W.Norton & Company. 1991（＝鈴木浩二監訳. リフレクティング・プロセス—会話における会話と会話. 金剛出版, 2015, p.42.）
- [13] 阿部和子. 実習—保育者養成の現状とこれから 3. 保育学講座 4 保育者を生きる—専門性と養成. 東京大学出版会, 2016, pp.241-264.
- [14] 真木悠介. 定本真木悠介著作集IV—南端まで—旅のノートから. 岩波書店, 2013, p.166.

Abstract

The purpose of this study was to characterize field learning in the context of child care provider education, and use the insights gained to develop teaching materials for instructing students in how to take field notes (journal-keeping) in a meaningful manner reflective of their field experiences. During coursework done in preparation for field training, many students have difficulty understanding processes such as how to set personal learning challenges or how to keep field journals. This difficulty can arise when the education program does not sufficiently define the inherent significance of field learning (what is to be learned, and how); as a result, students do not receive adequate instruction in how to take field notes in a manner attuned to the characteristics of field training.

The author, as an educator of child care providers, has taught the Child Care Field Training I (Welfare Institutions) course in the Department of Child Studies at Otsuma Women's University for many years. In the 2021 academic year, the department launched a new course, Child Care Field Training Guidance I B, to provide students with preparatory and follow-up guidance on field training. In conjunction with this, the author re-assessed the teaching materials he had been using. That analysis provided the foundation for this study's development of new teaching materials.

This study produced two key outcomes. First, it logically established the defining characteristics of field learning in this context as: facilitating students' understanding of the expertise required for caregiving work that supports the lives of children and service users; and providing deeper insight into the foundation of that expertise, namely, appreciation of the preciousness and equality of every person (respect for the human being). Second, it created teaching materials intended to help each student record field notes in a meaningful manner reflective of their daily field experiences, especially with regard to their diverse interactions with children and service users, and the emotions that those interactions evoked in the student and the others.

(受付日：2023年2月22日，受理日：2023年3月29日)

加藤 悦雄 (かとう えつお)

現職：大妻女子大学家政学部児童学科

東洋大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程満期退学。
専門は児童福祉論，子どもの権利論，保育士養成教育。

主な著書・論文

〈つながり〉の社会福祉一人びとのエンパワメントを目指して（共編著，生活書院，2020。）
食からの貧困対策からコミュニティ形成へー子ども食堂の展開過程（単著，農業と経済．Vol.87, No.4, 2021, pp.34-40）
「子どもの権利」を尊重した児童福祉援助を基礎づける倫理的メカニズムの探索ー人権の歴史的コンテクストの分析から（単著，大妻女子大学家政系研究紀要．2022，第58号，pp.69-79）。